

栗林輝夫先生を偲ぶ会・第二部座談会

2015年9月23日（水・祝）13：30から、関西学院会館「光の間」において、「栗林輝夫先生を偲ぶ会」が、キリスト教と文化研究センター主催、神学部・宗教主事会共催のもと行われた。

第一部は、舟木讓大学宗教主事司式のもと「栗林先生追悼礼拝」が行われ、第二部は山本俊正キリスト教と文化研究センター長司会のもと「座談会～栗林先生の業績と働きを覚えて」と題し、座談会が行われた。今紀要に、この座談会を掲載する。

座談会登場者は次の4名の方々である。

辻 学	広島大学大学院総合科学研究科教授
岩野祐介	関西学院大学神学部准教授
大宮有博	名古屋学院大学商学部准教授
西原廉太	立教学院副院長・立教大学文学部長

第二部 座談会

司会 お話をしていただくのは、4人の先生方です。広島大学の辻先生、関西学院大学からは岩野先生、名古屋学院大学の太宮先生、そして東京の立教大学からは西原先生にお話をさせていただきます。ここに書かれている順番でお話をさせていただきたいと思っております。

最初に広島大学の辻学先生です。辻先生は広島大学に移る前、関西学院大学商学部の宗教主事をされておりました、実は私の前任者ということでございます。ですから、栗林先生とはこのキリスト教と文化研究センターでの交わりのほかにも、宗教主事として宗教主事会等でも長い間交わりがあったということでございます。

それでは、最初に辻先生からお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

辻 みなさん、こんにちは。広島大学で新約聖書学を教えております辻と申します。私は、ただいまご紹介いただきましたように、1997年から2007年までの10年間、商学部で宗教主事をしておりまして、栗林先生とは同じ宗教主事として、またキリスト教と文化研究センターでの活動を通して、一緒に働く機会を持つことができました。栗林先生とは関西学院に私が赴任しました1997年4月に初めてお目にかかったのですが、本でしか名前を知らなかった有名人を初めて見たときの軽い興奮があったのを覚えています。でも先生はとてもフランクで、いつも会ったときには、「やあ、辻さん」という感じで、非常に親しげに声をかけてくださいました。実はそうではない先生も、他にはたくさんおられたのですが、栗林先生はとてもさわやかな印象があって、偉そうにしない偉い先生だったなと思います。偉そうにする偉くない先生もいたのですが、まったく逆だったということです。

栗林先生は法学部の宗教主事だったわけですが、私の印象としましては、それと同時にキリスト教と文化研究センターでの仕事に、先生は非常に強いやり

がいを感じておられたような気がいたします。おそらくそこで、神学者としての先生の関心がより強く展開されていたからではないかと思うわけです。

栗林先生と言えば、まずあげられるべきは『荊冠の神学』であるということは、今更口にするまでもないほどのことだと思います。この『荊冠の神学』が出版されましたのは、1991年のことでしたけれども、私は当時スイスに留学をしております、留学先にこの本を送ってもらって読んだのですが、その時の衝撃は忘れることができません。組織神学の本で、こんなに最初から最後まで集中してひきつけられながら読んだ本というのは、初めてでした。学生時代から、神学の歴史をまとめたり、欧米の学者が言っていることを紹介したりするだけの本とか、そういう授業といったものにはたくさん接してまいりましたけれども、そういうことしか知らなかった自分にとって『荊冠の神学』は、「神学する」とはどういうことなのか、それを教えてくれた本でした。その内容が持つ衝撃というのは、みなさんもよくご存じのところだと思うのですが、私自身にとりまして、もう一つ衝撃的だったのは、『荊冠の神学』の中で引用されている日本の新約聖書学者が、荒井献と田川建三だけだったということです。外国の聖書学者にはたびたび言及されているのですが、日本のいわゆる教会的な聖書学は、栗林先生の神学にとって何の役にも立っていなかったというわけです。このことは実は後から栗林先生に直接申し上げたことがあるのですが、「あれはアメリカで書いたものをもとにしているからなあ」と先生は苦笑しておられました。

栗林先生が亡くなられて、個人的に悲しいということと同時に思うのは、私たちは「日本の神学者」と呼べる数少ない人物を失ってしまったということです。他人の神学を紹介するだけの人間というのはたくさんいるわけですが、しかし自ら神学を築くことのできる本物の神学者は、残念ながら日本には数えるほどしかいません。わずかしかない。ほとんどいないと言ったら、神学者のかたがこの場にたくさんいますから申し訳ないのですが。

私が留学していましたスイスのベルン大学で新約聖書学を教えていましたウルリッヒ・ルツという先生がいます。このルツ教授は日本通なことでもよく知られている人物ですが、そのルツ教授から直接こう言われたことがあります—

日本は西洋神学の博物館であると。それは日本の神学の欠落に対する批判だったのです。欧米に評価されるものだけが本物なわけでももちろんありませんけれども、日本の神学として世界に紹介され、知られているものとしては、おそらく北森嘉蔵の『神の痛みの神学』、そして栗林輝夫の『荊冠の神学』くらいしかありません。小山晃佑氏の『水牛神学』は、日本の神学というよりもむしろアジアの神学といったほうが適切な感じがします。ドイツに、新しい神学書や神学の動向を批判的に紹介する Theologische Literaturzeitung、『神学文献新聞』という研究者必読の月刊誌がございます。その2001年6月号に、「アジアにおける新しい神学」という論文が載っており、そこで『荊冠の神学』と『日本民話の神学』が紹介されていました。今日そのコピーを資料として添付しておりますので、よろしかったらご覧ください（注：本稿には添付していません）。

さて、『荊冠の神学』の後に出された栗林先生の著作は『日本民話の神学』です。1997年の出版ですが、これは私が関西学院に奉職するようになりまして、栗林先生と親しくお付き合いをいただくようになった年の出版だったということもあり、個人的にも非常に思い出深い一冊です。ここにも、『荊冠の神学』と対象は異なるとは言え、「『中央』ではなく『地方』、『中心』ではなく『周縁』、『辺境』の神学」（11頁）という栗林神学の視点ははっきりと書かれています。本の冒頭で、「ニューヨークやテュービンゲンの神学部の教室で学んだことをアジアや日本の場に適用するのではなく、むしろそれぞれの場から欧米の神学を批判的に脱構築し、そして新しく再構築することが正しい」（14頁）と栗林先生がはっきり書いておられる通りです。

しかし、この『日本民話の神学』を『荊冠の神学』と比べたときに、一つ気が付く点があります。それは、教会という視座の後退です。『荊冠の神学』では40ページ近くからなる一章を割いて、教会はどうあるべきなのかという問題が論じられています。「今や信仰者のコミュニティは世界の中心に教会を据える『教会中心主義』を脱して、被差別者の住む外側から（from without）解放の指針を学び直さねばならないときに至っている」（472頁）と。ところが『日本民話の神学』には、このような考察はありません。それは単に民話を手掛かりとして

伝統的聖書解釈を脱構築していくという対象の故だけではないように思います。教会はどう民話と聖書を読むべきかという論点があってもおかしくなかったと思うのです（添付の参考資料〔35頁〕をご覧ください）。

『荊冠の神学』はアメリカでの学位論文が基になっているためでしょうか、プロレゴメナ、キリスト論、神論、教会論といった構成を保っており、西欧神学の枠組みにまだ忠実になっています。教会論はその一部として論じられているわけです。しかし、『日本民話の神学』では、そのような枠組みはもはや意識されていません。だから、教会論も取り立てて述べられていないと言ってしまえばそれまででしょう。しかし、それは同時に栗林神学が教会という生活の座と距離を取り始めたことのあるのではないかと、私には思われます。先生は法学部の教員でしたが、神学部でもっと教鞭をとって、栗林先生の神学をこれから伝道者として歩みだす神学生たちに広めてほしいという趣旨の要望に対して、自分の神学は教会神学ではないからという返答を先生がされたという話を思い出します。神学部で兼担としてもっておられた授業の中でも、また折に触れても、栗林先生は教会について話してはおられましたけれども、しかし栗林神学が語るプラクシスは、教会という場よりも広い視野で語られる、キリスト教信仰者一人ひとりの課題というようなものになっていった気がします。だからこそ、先生は一般の学生にキリスト教の教師として語りかける宗教主事の職にとどまり、キリスト教と文化のぶつかり合いを目指して発足したRCC（キリスト教と文化研究センター）をご自分の足場とされたのではないかと、私には思えます。

栗林神学は社会的なコンテクストの中で、そのコンテクストに向けて発信されていく実践を視野に置いた神学です。あの2001年に起こった9.11の事件の日、先生は在外研究でアメリカにおられました。その体験が、その後続けざまに発信されていく平和の問題、特にアメリカにおける宗教と政治の問題をめぐる一連の論考の出発点になったことは疑いようがありません。先生がキリスト教と文化研究センターのセンター長として皆をけん引していかれた中で生まれた、センター最大の功績といっても良い『キリスト教平和学事典』、(2009年)はお

そらくその集大成でしょう。先生はさらに、原発問題を自らの神学的課題として、これに積極的にコミットしていき、神学者としての立場を明らかにしていきました。2013年に出された『原子力発電の根本問題と我々の選択』という書物の中で、先生は、「原発は現代のバベルの塔です。バベルの塔も原発もともに巨大なテクノロジーで人を取り込んで支配し、そこから逃れられないようにします」と述べておられます。現代の問題とぶつかる中で聖書を読む、その目の鋭さにはただただ敬服するしかありません。

これらはすべて、私たちが生きるこの世界の問題に信仰者としてどうかかわっていくかを問いつけるリベラル神学のあるべき姿を、この上ない仕方では現したものです。そして、自他ともに認めるリベラル神学の研究・教育の場であるはずの関西学院の神学部にとって、栗林神学は日本のみならず世界に向けて自信をもって示せる看板に、おそらくなつたのではないかと思います。しかしその可能性は今や失われました。それは栗林神学が、教会論という視点で前面に出さなかつたことと、おそらく無関係ではないでしょう。もしかすると、これは私の邪推かもしれないのですが、栗林先生の中に、あの『荊冠の神学』における厳しい問いかけがあつたにもかかわらず、教会中心主義からついに脱却できずにいる既成の教会に対する失望があつたのではないかという気もいたします。先ほどの原発に関する本の中で、先生は質問に応じる形でこう言っておられます。「今の教会で、私が問題だと思うのは、多くの人が信仰は信仰、技術は技術と二分してしまっていないかということです。日曜日は教会に行つて、心を自由にしますが、普段の日は技術の言いなりになっている……。一概には言えませんが、いずれにしても、教会が技術を信仰的に問うことはほとんどありません」(176頁)。

栗林輝夫という、日本を代表する世界的神学者の問いかけと主張を受け継ぎ、それに応じる、それに応えてその先を築いていく用意が私たちには、また関西学院にはあるでしょうか。まずはその務めを、この世界に向かって神学を語る、その責任を負う神学部に、そしてリベラルなキリスト教のプラクシスを追い求めるキリスト教と文化研究センターに期待したいと思います。とりわけ神学部

には、栗林神学もたらしてくれた「神学する視点」を、次世代の教会を担う人たちに伝えていく働きを、強くお願いしたいと思います。

栗林先生は、1995年5月に東京ミッション研究所というところに招かれて講演をしておられ、そのときの講演録が出版されています。その中にこういう言葉がありました。「聖書というのは、先ほど来申し上げていますように、やはり被差別者の目、中央ではなく周縁の目を通して読まれるべきで、故に、聖書を差別されたものに取り戻していく必要があると思います……。私は聖書学者でもなんでもないのですが、聖書学者の中でそういうことをやってくれる人が一人もいないから、専門外ですけれどやらざるをえないということでは、聖書をもう一度本来の読み手にかえしていくということなのです」(11-12頁)。この指摘には、聖書学者の末席をけがす者として深く恥じ入るほかはありません。今みたいな仕事のしかたで良いのか、栗林先生のこの言葉にきちんと応える道は何なのか、自分に問いかけております。ご静聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。信仰のプラクシスという栗林先生が『荊冠の神学』でもずっと唱えていらっしゃること、また教会論との接点というようなことにも触れていただきました。ありがとうございました。続いて、関西学院大学の岩野祐介先生にお話をうかがいたいと思います。岩野先生と栗林先生は、お話の中にあると思いますが、岩野先生の研究テーマでもある内村鑑三の研究等で接点があったとお聞きしております。それでは、先生よろしくお願ひします。

岩野 私は2008年に神学部にて赴任しましたので、栗林先生と直接のお付き合いが長いというわけではありません。しかし、私は一度大学を出て働いて、また大学院に戻ってということをしたのですが、その間「いまの日本で神学者と呼べる人は誰ですか」といったことを先生方に伺うと、栗林先生のお名前がでくるということを体験していました。

私は学生YMCAの出身です。そして2003年の学生YMCA夏期ゼミナール（これはかつて内村鑑三が「後世への最大遺物」という講演をした夏期学校の後身

です)の講師が栗林先生だったのです。当時すでに栗林先生は関西学院大学の先生でした。私は京都大学キリスト教学研究室の大学院生で、夏期ゼミナールそのものには参加できなかったのですが、京都大学YMCA地塩寮のすぐそばに住んでおまして、寮生の現役学生たちが夏期ゼミナールの事前読書会として栗林先生の『荊冠の神学』扱うのだが、少し難しいので、とってレポーターの依頼を私にしてくれました。ちなみにその2003年の学生YMCA夏期ゼミナールで、栗林先生と並んで講師を務められたのは、バプテストの木村公一牧師だったと思います。イラク戦争に反対し、人間の盾になろうという活動をされた方です。

さてその読書会の時に、『荊冠の神学』の何章分かをまとめて、私は寮生に対して要約と自分の感想とを少し述べました。率直に言って、栗林先生は非常に厳しいことを求めておられるなということを感じました。果たして本気でこのすべてを、読者に求めておられるのだろうかといったことです。また、本の中ではこんなこと言っておられるけれども、現実にはできるわけがないじゃないとか、キリスト教が日本でどれだけ存在感しかないかをわかって言っておられるのだろうか、1パーセントのキリスト者に。そういう状況にあって、これは本当に厳しい要求をしているなということを感じながら、読みました。

その読書会の後に、寮生の一人が京都から関西学院に来て、直接栗林先生にご挨拶とお願いをしたら、本の印象とだいぶ違う方だったと伝えてくれました。たいへん物腰の柔らかい方で、学生の方は失礼があって怒られたりするのはないかと不安な気持ちでお訪ねしたのですが、全然そんなことはなかったということでした。それは、どういうことであろうか、と私は考えました。もう学生を怒っても仕方ないという気持ちでおられるのか、あるいは、栗林先生はご自分の本当に熱い部分にはなかなか触らせない方なのか、どういう感じであったのか。その後、私が関西学院大学にきて直接お会いしてから、結局そのあたりはよくわかりませんでした。

私の専門は内村鑑三や、日本のキリスト教史、例えば日本の社会運動とキリスト教の接点等を扱っております。その立場で『荊冠の神学』に対する私の印象を、もう少し述べさせていただきます。先ほども申しました通り栗林先生は

非常に厳しいことを書いておられるのですが、自分の主張をするために聖書の言葉を引っ張ってくるというようなものにはなっていないのです。自分の言いたいことが最初からあって、それを言うために聖書や神学者の言葉を引いてくる、ということではなく、キリスト教、イエスの言葉は人間をどう描いてきているのか、人間に何を語ってきているのかということに向き合った結果としての栗林先生の主張である、という印象を受けます。また、非常に厳しいのですが、むやみに扇情的ということではないと思います。だからこそ、読者の側も真面目に受けとめてしまって、これは実現可能なのか、もしかするとこの著者は私たち読者にすでにながかりしておられるのではないかと、といった気持ちになったのかもしれません。

私は、「お前は神学部の教員か」と問われたら「はい」とこたえますが、「お前は神学者か」と問われたら、自分から「神学者である」とは言えないように思います。というのは、知識だけではなく、仏教的にいうところの「徳の高さ」のようなものが要求されるのが「神学者」だと思うからなのですが、栗林先生はその神学者であったと思うのです。そして、栗林先生は神学者であって、しかもいわゆる象牙の塔に閉じこもっているような方ではありませんでした。先生の研究室には大変な量の蔵書があって、それが窓をブロックして部屋が薄暗くなっていたほどでしたが、栗林先生はそこに閉じこもっている方ではありませんでした。運動や主張をするためではなく、栗林先生ご自身が聖書を読んで、イエスの言葉を聞いて、そこから導きだされたものを書いておられたのだと思います。

その栗林先生がここ数年集中的に取り組んでおられたのが、東日本大震災と福島第一原発事故以降の問題であったと思います。原子力の問題については、少し前から扱っておられまして、例えばご著作にも、『原子爆弾とキリスト教—広島、長崎はしょうがないか』という2008年のものがあります。私が神学部で担当した基礎演習という授業の中で、長崎から来た学生が、この本を扱ってレポートをしてくれました。長崎という環境で平和教育を受けて考えてきた学生にとっても響く本なのだと思います。そして、そこでも述べておられますし、最近の

本でもそうだと思いますが、栗林先生は「人間が人間を支配するような仕組みになるというのはおかしい」「人間は人間のいのちを大事にしななければいけない」ということをずっと変わらず述べてきておられる。それは『荊冠の神学』まで遡ってもそうだと思います。人間が人間を支配するためには、本来同じ人間ですから、何か特別な仕組みを作り上げないと、無条件に人間がほかの人間を支配することはできない。そのなかで、原子力や、原発の技術的な仕組み、あるいはそれが財界や政治を巻き込んでいく仕組みといった、誰にでも平等に開かれてチャンスがあるわけではなくて、隠されていて、そこに加わるには何か特別な奉仕や貢献が求められる仕組みになっていて、結果として人間が人間を支配するテクノロジーになっているのだということを、私が読んでもわかるような、また学生が読んでもわかるような形で、述べておられます。ここではあえて「仕事」と申し上げますけれど、そういう仕事ができる方はあまりいらっしゃらなかったと思います。キリスト教会でも栗林先生は発題をされたことがあります。このようなテーマでどなたが発題できるかと思ったら、栗林輝夫先生しか思いつかないという感じだったのであろうと思うのです。

一番新しいRCCの紀要の中でも、栗林先生は日本の神学ということをもう一度考えなければいけないと言っておられます。日本の神学ということ、特に欧米の神学の影響を受け、アジア的な自然観を、アニミズム、汎神論、あるいは時にはある種の神秘主義ではないかというような言われ方をしたため、あまり真面目に考えてこなかったが、もう一回アジア的な自然観に基づいて、日本の神学として考え直さなければならない。そしてそれはまさに教会の外にまで届く神学でなければならない。あるいは、神学という語り方自体を考えなければいけないのかもしれませんが、そのようなテーマを、私たちに残してくださったのだと、日本のキリスト教思想史を扱っているものとして、今は考えています。

私は研究者としての栗林先生に遠く及ばないものですが、内村鑑三を専門としてきたということで、内村の技術観が書いているものがあったら教えてほしい、というような形で声をかけていただいたこともありましたので、引き継いでいくべきことだと思っています。紀要でも、いづらか内村関連のことを述べてく

ださっていて、これは私たち内村研究をやっているものとしても、日本におけるキリスト教研究の中で、明治以降の日本のキリスト者の思想を扱うということは、やはりマイナー・ジャンルというところがありますので、大変勇気づけられることでした。

最後に一つ、これはおそらくこの場では私からしか出ない話題だと思いますが、7月の記念会のときに、ヘアマンセン先生が栗林先生の文章をまとめた冊子を作って配付してくださいました。その中に「鉄人28号とキリスト教」というような内容のものがあつたのです。これは当時の関西学院大学学生 YMC A の学生さんが栗林先生のところにいって、お願いして書いてもらったものだと思います。ですから、冊子では初出不明ということになっていたかと思いますが、あれは関西学院大学学生 YMCA の『やまびこ』という会誌に載っているものだったのではないのでしょうか。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。時間のほうは順調に進んでおります。ありがとうございます。続いて、名古屋学院大学の宮有博先生にお話をさせていただきたいと思います。宮先生は学生時代でしょうか、栗林先生から実際に教えていただいたことがあると聞いております。それ以降も、一緒にいろいろ研究などをなされて、2013年、『シネマで読むアメリカの歴史と宗教』を栗林先生と共著で出版されていらっしゃいます。それでは宮先生、よろしく願いいたします。

大宮 最初に栗林先生とどう出会ったかをお話します。そうすると先生のお人柄が皆さんに良く伝わるでしょう。大学4年生の春休みに、当時所属していた教派の神学校の先生から、「今度、関西学院大学に『荊冠の神学』を書いた栗林先生が来るから、色々教えてもらったらいい」と勧められました。早速、『荊冠の神学』（当時4800円!）を買って、本文の半分くらいと「あとがき」を読み、先生の研究室に押しかけました。

最初に先生に私がした質問は、私の持っている『荊冠の神学』の裏表紙に赤

字で残っています。「先生の神学はシングルイシューの神学ではないのか？（神学の普遍的な課題とは結びつくのか？）」「神学とアジテーションは何が違うのか？」私の失礼極まりない質問に、先生はていねいに答えて下さいました。

この時以来、私はほぼ毎週、先生の研究室に伺うようになりました。後になって神学生が何人か来るようになりました。研究室に行きますと先生は私たち学生に「なんか面白いことない」とお聞きになります。そこから、しばらくタバコの煙の立ち込める研究室で雑談をします。そして先生は、ゆったりとした「べらんめい調」で神学の話をして下さいます。先生は私たちに「自分で神学ができるようになるためには、神学の資料と規範について理解しなければならない」とよく話しておられました。そして、コーンでもリユースでもC.S.ソンでも、必ず初期の本を読むように勧められました。「どの神学者も後期になると体系的に言うとして、つまらなくなる」からだそうです。

関学に来られた翌年から先生は、神学部で組織神学特講を担当下さいました。最初の年の教科書は、『荊冠の神学』でした。神学部に来ると先生は、学生控室に入ってそこに置いてある『スピリッツ』を読んで、学生と雑談をして、それから教室に入ります。

当時、摂津富田教会の桑原重夫先生—この方はパウロ主義批判をずっと展開されている方なので—から私に、栗林先生と議論をしたいから「リング」を用意して欲しいという「相談」がありました。栗林先生は、1コリント7:20-24の「自由の身になることができるとしても、むしろそのままいなさい」（21節[新共同訳]）を「自由市民になれるとしても、私（＝パウロ）とイエス・キリストと同じ様に、差別された人々の側にとどまっていなさい」という意味だと解釈しています。また栗林先生はガラテヤ3:28のパウロの言葉「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」を挙げて、パウロを解放主義の可能性を見ようとしています。桑原先生はパウロ主義批判の旗手ですから、そこに疑問を感じられたのです。そこで「聖書を読む自主講座」を開催しました。70人近い観衆の前で繰り広げられた議論に、出席した学生・

一般参加者は、改めて神学の楽しさを知りました。

私はかなり早い段階からアメリカの神学校に留学したいと考えており、栗林先生もそれを強く勧めて下さいました。先生からアメリカで学ぶコツから、アメリカで奨学金を集める方法やアルバイトの仕方を教えてもらいました。バークレーに留学して3ヵ月くらいした頃、私はカルチャーショックにかかってしまいました。この絶妙なタイミングで、先生から手紙が届きました。手紙には、「ところで授業はいかがですか？ 始まりはいつもハイパーな気分で、イケイケムードで。それが今も続いていますか？ でもそろそろリバウンドで意気消沈することでしょう。お楽しみに待っていてください。」とあります。この手紙は研究室の机に入れてありまして、落ち込むことがあると取り出して読んでいます。

次に栗林先生の神学を振り返ります。年表（36-37頁）をご覧ください。この年表で私は、先生の業績を3つのステージに分けました。第1のステージは、『荊冠の神学』から『日本民話の神学』までの頃です。この頃の先生の神学は、被抑圧者の証し、体験談、説教、告白、歌、詩を第一級の神学の資料として耳を傾けることに時間を割きます。その被抑圧者の経験を聖書と教会の伝統とを組み合わせるという作業を行います。こういった方法はティリッヒの関連の方法に通じています。先生はこの手法をニューヨークのユニオン神学校で、政治神学者ドロテー・ゼレヤアフリカンアメリカン神学の第1世代を代表するジェームズ・コーンから学んでいます。

第2のステージは、バークレーのGraduate Theological Unionでの在外研修時から『現代神学の最前線』までです。この時に、私はバークレーで先生に一度お目にかかったことがあります。この時、先生はものすごい勢いでアメリカ神学のトレンドを“catch up”していました。また、先生はバークレーで、ウーマニスト神学者シェリル・カーク＝ダガンのセミナーに出席なさっていました。このセミナーは組織神学専攻の博士課程の学生の必修科目でした。このセミナーと『福音と世界』の連載をベースメーカーにしながら、アメリカの神学を俯瞰した『現代神学の最前線』が準備されました。

第3のステージは政治神学のステージです。この頃先生が目指していたのは単

なる政治神学ではなく、コーネル・ウエストの言うところの「預言的」発言でした。この政治神学への発展は、『荊冠の神学』ですでに予告されていました。コーネル・ウエストを引用して、黒人神学から「底辺文化や大衆宗教が持つ解放的側面」を学ぶべきであり、ラテンアメリカの解放の神学からは「先鋭な政治経済分析」を学ぶべきであると述べています。

例えば、先生はアメリカから帰って来てすぐに、断続的にアメリカ批判を展開します。これらの本は9.11「ブッシュの戦争」に対する批判です。この頃に先生は『原子爆弾とキリスト教』という本を出されました。この本は小さい本で先生の業績を振り返る時に忘れられてしまいそうなのですが、原爆と原発は先生にとって大きな課題だったのだと思います。実は博士論文のテーマを探していて、先生に相談をしたことがあります。その時に原爆をテーマにしてはどうかと、真剣に勧められました。

このように先生の研究を駆け足で振り返ってみました。栗林先生のお書きになったものには、人権教育の教材や廃刊になった雑誌記事も含まれております。こういったものが埋もれてしまわないためにも、またこれから日本において解放の視点から神学を学ぼうとされる方のガイドともなるように、著作集か選集があると良いでしょう。また、先生がご自分の健康を削ってまで完成を急がれていた未完の2冊は、まことに身勝手な意見ではありますが、やはり読みたいです。手塚治虫だって『ルートヴィヒB』や『ネオファウスト』は未完のまま出版され、たくさんの人に読まれています。

さて、ここから問題提起に移ります。私たちは先生から投げ渡された「外套」でヨルダン川の水を打って、日本の解放の神学を前に進めていかなければなりません。では、私たちはここからどこに向かって進めばよいのでしょうか。

『荊冠の神学』が刊行されて25年近くになります。しかし日本において解放の神学は、教会においても公共圏においても大きなトレンドにはなりません。年表にもありますように、アリストアー・マクグラスやN. T. ライト、ウィリアム・ウィリモンによって書かれたアメリカの保守福音派から進歩主義福音派までを読者対象とする本は次々と日本語に訳されています。しかし先生が『現代神学

の最前線』で紹介したコーネル・ウエストの著作を出版したのは、1冊を除いてキリスト教以外の出版社ですし、修正主義神学の著作はまだ日本語訳がありません。

ですがそれは悲観的なことではありません。日本の教会には、それにあった解放の神学のパッケージを用意すれば良いのです。日本の教会が立っている場所やそこに集まっている人たちは、ラテンアメリカやインド、フィリピン、アフリカンアメリカンの教会とは違うのですから。

そのパッケージとして2つの戦略を挙げます。第1に、『荊冠の神学』後の25年を振り返った時、「聖書の翻訳」に日本版の解放の神学の可能性が隠されているのではないかと考えます。そもそも日本において批判的聖書学は、当初は無教会と結びつきながら、制度的教会やキリスト教学校、そして社会に対する批判の学として成り立ってきました。聖書学者の中には自己相対的に、また批判的にキリスト教と関わる人がいます。しかし単なる批判原理として終わるのではなく、教会が何を誰に伝え、誰とどこでどのような共同体を形成するかを考える学としての側面も持つ必要があると思います。

その聖書学をベースにしなが、周縁者との対話の中で作られた個人訳として釜ヶ崎の本田哲郎さんの訳があります。また山浦玄嗣さんのケセン語訳も挙げるべきです。本田さんの聖書の翻訳は周縁者の文化に聖書を結びつける試みです。また、山浦さんの翻訳は聖書翻訳にまともにつき權威に対する挑戦でもあります。実は、こういった翻訳が聖書学の領域で真剣に議論されていませんし、組織神学にインパクトを与えてもいません。このような翻訳の試みは、聖書学も組織神学も脱權威・解放主義に向かっていくための車輪になるのではないのでしょうか。

第2の戦略として、「知の統合」を挙げます。学問の細分化が進みました。また神学の中では聖書学と組織神学が対立するような状況がしばしば見られます。このなかで「谷間に置かれた生命」の解放を規範にした知の「統合」が進められる必要があります。つまり、学問が解放の視点で整理されていくのです。1988年にエルサルバドルで虐殺された解放の神学者イグナシオ・エラクリアは、

キリスト教大学について次のように述べています。

キリスト教精神に基づく大学は、そのあらゆる学問活動の焦点を、貧しい人々の優先的選択 (option for the poor) というキリスト教的選択に照らして決定します。……大学は貧しい人の間に根をおろし、学問を持たない人々の学問となり、声なき人の声となり、たとえ貧しく何も持っていないくても、自分たちの置かれている状況のゆえに真実で、正しく、理性的であろうとする人々、けれども自分たちの考えを学問的に正当化することの出来ない人々の学問的助けとならなければなりません。(ジョン・ソプリノ『エルサルバドルの殉教者』 柘植書房新社、1992年)

被抑圧者の解放や積極的平和の実現をテーマとした知の統合のあり方を示していくことが、キリスト教大学の使命となることでしょう。

最後に次世代の神学者の育成の課題を挙げたいと思います。栗林先生はニューヨーク、メキシコ、スイスでの人々の出会いを通してご自身の神学を形成なさいました。しかし最近の大学院生は留学することが減りました。それは日本の大学院でも、神学領域の博士号を取得できるようになったからかもしれません。しかし、留学は学位取得だけが目的ではありません。留学の最大の目的は「出会い」だと思います。まず、留学すると学びのためにあらゆる時間を使うことができます。授業やセミナーを通して、本格的に神学に出会うことができます。また、アメリカの神学校の中には、世界中から司牧者、修道士、教師、活動家が神学を学びに集まってくるエキュメニカルかつインターレリジヤスな神学校があります。また多くの優れた学者がいます。先生がFacebookに載せられた留学時代のお写真を拝見すると、本当にイキイキしておられます。こういう豊かな時間と出会いが先生の神学を醸造したのではないかと思います。同じ様に若い人たちが留学できるしくみが必要です。

また日本においても、エキュメニカルな研修の場が必要です。解放の神学が大切にしてきた手法のいくつかは、今では名前が置き替えられて一般化されています。例えばフレイレの手法は「ファシリテーション」です。こんな方法を使って新しい神学の共同討議の場があるとはよいですね。

このようにして栗林先生の築いてこられた神学を振り返ることは、日本の文脈に合った解放の神学のパッケージをどのようにして作るかを示唆するものです。ここから日本の解放神学の新しいステージが始まりますことを願ってやみません。

司会 ありがとうございます。大宮先生と栗林先生の個人的な交わりや、栗林先生の神学の歩みを三つのステージに分けてお話しをしていただき、また今後の神学の展望ということにも言及していただきました。ありがとうございます。

続いて、立教大学の西原廉太先生にお話をさせていただきたいと思います。西原先生は新教出版から出ている雑誌『福音と世界』の2015年9月号に「栗林輝夫氏の逝去を悼む」という一文を寄せられております。先生との交わり等も含めてお話しいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

西原 みなさん、こんにちは。立教大学の西原と申します。5月に栗林先生が主のもとに召されたと伺って、二日ばかり仕事が手につきませんでした。ちょうど去年の10月16日に関西学院の神学部125周年記念の行事で、私を招いてくださりまして、ディアコニアについてのお話をさせていただいたのですが、それが同じこの場所でした。ここからつたない話をさせていただいて、ざっと会衆席を見まわしたところ、なんと栗林先生がおられるんですね。私はびっくりすると同時にとても嬉しかったのです。わざわざ栗林先生が私の話を聞きにきてくださって、その後しばらく再会を喜びあって、いくつかお話をさせていただいたときには、お元気なようにお見受けしたので、ご病気のほうもずいぶんよくなられているのかなとある種の安心感をもって東京に帰ったものですから、この5月に急逝されたと聞き、信じがたい思いでございました。

私は、もともと京都大学の工学部でした。学科は金属工学科だったのです。京都駅の南側に東九条という地域がありまして、そこには在日の韓国・朝鮮人の方の多住地域があり、戦前、戦中に強制連行などで連れてこられた方々などの二世、三世の方が住まれている地域です。大変な差別がありました。実は大学の1年の時に、その地域で子供会活動を通して、私は東九条に関わるようにな

りました。そのとき、私はまだクリスチャンではなかったのですが、京都のエキューメンカルなネットワーク「東九条キリスト者現場研修会」というものが開催され始めたころだったので、私はそこに参加しまして、初めて聖書と出会いました。私の聖書との出会いというのは東九条の在日コリアンの方々の中のだただなかでありました。それが私のイエスとの出会いだったのです。そのうちに聖公会SCMや、NCC関西青年協議会などと関わりながら、さまざまな課題にいざなわれていくようになるわけです。被差別部落の問題もそうですし、沖縄の問題、アイヌの問題、天皇制の問題。それらと教会の問題、キリスト教の問題に繋がるようになりました。大学を卒業するときに、大きな企業に内定をもらっていたのですが、名古屋にあります名古屋学生センターという聖公会の施設がありまして、この方もつい先々週なくなったのですが、栗林先生も大変親しくされていました、その名古屋学生センター総主事の野村潔先生から呼ばれて、最終的に、直前にその内定を断って、いろいろな方々に迷惑をかけて、大学を卒業してから名古屋学生センターに入りました。そこでも沖縄やフィリピンや在日韓国・朝鮮人の方々をめぐるさまざまな 이슈と教会が向き合わなければならないというようなメッセージをずっと発信していました。その中で、私は一つの課題にぶち当たるわけです。それは名古屋学生センターなどから、教会の課題として沖縄の問題や差別の問題や天皇制の問題に取り組まなければならないと発信するのですが、それがなぜ教会の課題かと明確に言えていない。つまり教会に全然伝わらないわけです。単なる「社会派」だと思われて、危ない連中だという形でレッテルを貼られるのです。そういうような中で、一度しっかりとこの問題を勉強したいと思ったのです。さまざまな社会的 이슈、諸課題になぜ教会が取り組まなければならないのか、神学として考えなければならないのかということを考えたいと、当時の野村総主事にご相談したところ、では神学校に行けよという話になりまして、それで私は今から24年前の1991年の4月に聖公会神学院に入学いたしました。それで神学の勉強を始めることになったのです。

ちょうど私が入学した一か月前、1991年3月に栗林先生の『荊冠の神学』が出

されるわけです。ですから私は4月に入学して最初に手にとった組織神学の本、自分で選んだ神学書が、この『荊冠の神学』であったのです。神学の手習いとして、私は全く神学に初めて取り組んだところなので、組織神学の「いろは」もわかっていませんから、とても手に負えるものではない、読み込めてはいなかったと思います。しかし結果的に私はこの『荊冠の神学』を、聖公会神学院の3年間、3年かけて読み切った、そんなふうに思っています。それ以来、この『荊冠の神学』に私は圧倒され続けているし、そして私自身の根底的な問いに常に応答する関係としてあるものが、この『荊冠の神学』であります。私は聖公会神学院の3年生と、立教大学の大学院の1年次をダブルスクールで兼ねたのですが、なぜ今度は大学院で学ぼうと思ったかといいますと、動機はやはりこの栗林先生の『荊冠の神学』です。これをもっと深く研究したいと思ったからです。私自身、当時すでに修士論文のプロトタイプのようなものを書いていました。これは当然世に出ていないのですが、「天幕づくりの教会論」というもので、教会論なのですが、解放的教会を論じたものなのです。その原稿を持って実は、やはり栗林先生の盟友で、当時立教大学におられた金子啓一先生の門を叩いたのです。金子先生のところにその論文の原稿を持っていきまして、こういうのをやりたいと申し上げたら、是非来なさいということで、それで大学院での勉強を始めました。ですので、今私はどこへいっても「聖公会とはなんぞや」ですか、アングリカニズム、エキュメニズム、そういった領域をやっていますけれど、私の専門は実は、当初の希望としては、アングリカニズムではなかったのです。たまたま書いていた論文の一章、一節部分が、リチャード・フッカーというアングリカニズムの神学者についてで、私の先代のアングリカニズムの担当教授の塚田理先生が、これはいいから、これを広げなさいということになり、それでアングリカニズムが専門となってしまったということなのです。

当時、私は勉強を始めた一院生だったにもかかわらず、栗林先生は私の書いた質問に丁寧に自筆の独特な字でお手紙で返して下さって、それは全部私の宝物です。栗林先生は本当に細かく私の拙論を仔細に読んで下さって、貴重なご指摘と励ましをいただきました。この『荊冠の神学』のベースとなったア

アメリカのユニオン神学校に出された博士論文も私にくださいました。そこにはさまざまな手書きのメモなどもありまして、それも私の大切な宝物となっています。

最近では、さきほど先生方よりご紹介がありましたように、栗林先生は原発の問題と教会、神学をテーマにされておられまして、私も実は小久保正先生が中心にアレンジなさっておられます関西セミナーハウスでの研修会で講師をさせていただいたのですが、その講演の中身はWCC（世界教会協議会）が昨年に出しました「あらゆる核のない世界の実現を求めて」というステートメントについての解題のようなものだったのです。その私の講演は、2年前に栗林先生がなされた講演を引き継ぐものなのです。そのご講演が本になっております。『原子力発電の根本問題と我々の選択：バベルの塔をあとにして』という形で結実しているわけです。私も講演中に何度も栗林先生について言及させていただきました。栗林先生が大きな関心を払ってくださっていたのが、立教大学にあった、もう閉炉になりましたが、実験用原子炉の導入過程の問題なのです。1950年代のことで、まだもちろん鉄腕アトムの時代で、原子力は夢のエネルギーという時代だったのですが、いろいろ状況はありますが、しかし、事実としては、アメリカ聖公会から日本聖公会を通じて、立教大学に原子炉が寄付されたということなのです。問題は、その立教の原子炉の竣工の際に、アメリカ聖公会総裁主教の「原子炉奉獻の祈り」をささげているということです。この問題をどう考えるのかということについては、栗林先生は大変気になさってください、私ももちろん聖公会関係で立教関係なので、これはぜひ何とかしましょう、やりましょうという話を、実は去年10月にお会いしたときも話していたのです。神戸国際大学に近藤剛先生がおられますが、近藤先生が最近その当時の聖公会側のトップであった八代斌助首座主教の手書きのさまざまな草稿を発見されました。そこに原子炉の奉獻の、アメリカ聖公会側の立教に寄付された経緯が細かに書かれていることがわかりました。近藤先生と私とで、科研費のテーマにして扱えたらいいねという話をしていたのですが、ぜひともその科研プロジェクト実現の際には栗林先生にも共同研究者として加わっていただけたらという

話をちょうど去年していたところでした。そういう意味でも、たいへん残念なことです。

私と栗林先生との出会いからお話をさせていただきました。お手元の文献表に、栗林先生の著書の中に『総説キリスト教史』とありますが、正確には『総説キリスト教史3』です。これは実は共著で、同志社の水谷先生と、栗林先生と私の三人で書かせていただいたものなのです。栗林先生はアメリカの教会史、私は英国のキリスト教史とエキュメニズムで、これができあがったときに、あの栗林先生と名前が並んでいることが、とっても嬉しく、私にとって想い出深い本です。

2012年4月16日にこのようなメールを栗林先生にいただいています。

西原さん、栗林です。メールを有難うございました。小生のほうも、とんとご無沙汰してまして失礼しています。そもそも「西原さん」などと書くのは、今の御活躍の様子にはそぐわないのですけど、御容赦ください。

「荊冠の神学」を今も取り上げてくださるとは、大変有りがたいことで恐縮しています。小生、最近歳を取ったせいで出不精なのですが、7月12日の件、喜んで伺わせていただきます。また日が近づいたら、どんなところをお話したらいいのか、メールをいただけますか。準備いたしますので。

この5、6年、病気療養を口実に勉強をさぼりがちで。しかし、昨年は原発事故で心が折れる経験をしましたので、神学で糊口をぬぐう者の責任として原発だけは書いておかなきゃと、この一年ばかりは原発の技術神学をやっています。西原さんは工学関係のご出身だからいろいろ御存じでしょうが、小生、テクノロジーの神学は初めてだったものですから、とても愉しく勉強しています。お会いしたときは、いろいろ教えていただければ幸いです。

どうぞよいお働きをなさってください。まずはお礼と御連絡までに。

栗林輝夫 関西学院大学 法学部

2012年7月、この日付を強調したいのですが、3年前です。3年前、栗林先生を

聖公会神学院の特別講師としてお招きした際のやり取りです。先生方のお話にありました通り、『荊冠の神学』が世に出されて以来、実に20年が経過しました。しかし今一度『荊冠の神学』が問うたものはなんであったかを集中的に議論したいと思ったのです。その私の意図は、これも先生方のお話の中にありましたが、未だ、25年前に栗林先生が問うた問いに、日本の神学、あるいは教会は、先生の20数年前に投げかけられたその激烈なる問いにほとんど応答していない。しようとしていない。むしろ、いわゆる「属格の神学」の一形態として無害化しようとしてきたのではないか、という問いであったのです。ですから、この講演会を企画したときに、他の神学者の方々から、2012年の今頃やるのとか、今さらやるのかと言われましたが、そうではなく今だからやるのだという思いで、私はこの企画を考えました。それはやはり栗林先生が、『荊冠の神学』で述べられていること、辻先生が用意してくださった資料に『荊冠の神学』の目次がございますが、この流れの中で言われていることは、結局、具体的、日常的な解放の働きに参加することによって成立する信仰と行為との弁証法的プロセス、それが信仰的プラクシスなのだということです。それは苦しみ侮られてきた人々の生きた現実と、それへの私たちの共感、共生から始まるのだと。被差別の側に積極的に身を置く、つまり「立場をとる神学」が教会には大切なのだということです。そういうメッセージでありました。しかしそれに対して、私たちは果たして応えてきたのかという問いです。

では『荊冠の神学』を取り上げるときにどこが一番重要か、どの章が一番大事かという問いを出したいと思います。私は、実は『荊冠の神学』の「あとがき」が、大切だと思っています。「あとがき」こそが神学であると思っています。それはこの「あとがき」にこそ、栗林先生が何故『荊冠の神学』を書かなければならなかったのかという必然性が語られているからです。私たちが神学書を書くときに、本当にその必然性があるのか、「あとがき」があるのかという、私はそういう問いを常に栗林先生から与えられているのです。ここで栗林先生があとがきで書かれたことは、ご自身にとっての、抜き差しならない三つの差別の形です。ひとつは部落差別、それはお父様との関係。二つ目は女性差別、それ

はお母様の無念さとの関係。三つめは外国人に対する差別、それはお連れ合いとお子様との関係です。そういう三つの差別とのあり方について、栗林先生は「あとがき」で書かれています。「もし今私が大学教員という知的階層にパッシングしたまま口をつぐみ、私の歴史の前に累々として横たわる差別されたものたちの涙ひとつひとつを拾わなかったならどうだろうか。そして、歴史の未来に生きる次世代の子どもらに対して、希望と和解をつなげていく努力をしなかったならどうだろうか。そのときには私を責めて、母や祖父らの声がアベルの血のように大地から吹き出で、石も叫び始めよう」と。これこそが栗林先生の「あとがき」の重要さであり、この問いに私たちは応えなければならないだろうと、私は思います。この「あとがき」の一番最後には、「最後に妻のサビーネ、最終原稿に花の絵を描いて祝ってくれた二人の子どもに心からのありがとうと言いたい」と書かれています。そういう思いの中でこの書物を、神学をなされたのだと思います。

昨今蔓延するヘイトスピーチやそれに密接に関連する排外主義的な右傾化の問題、マイノリティの人々が置かれている人権状況はますます悪化の一途をたどっていますし、原子力発電の問題もまったく解決していません。最近の戦争への道を開くというそういった時代状況の中、こうした時代の中において信仰的プラクシス抜きに神学・宣教を担うことはおそらく許されないのです。「栗林輝夫」という類まれな神学者が残してくれた問い、その問いというのは突き詰めていくと、「あなたは、どこに立って、誰とともに神学をするのか」となります。その問いを、特に、次の世代の者たちは誠実に引き継いでいきたい。そのように思っています。

司会 ありがとうございます、西原先生。先生の信仰の出発点と歩みについてお話を始めていただいて、栗林先生のあとがきのこと、また私たちが栗林先生から問いかけられている問いというものに、どのように私たちが向き合っていけばいいのかということも伝えてくださったと思います。ありがとうございました。

最後に、東京神学大学学長の芳賀力先生から、この会のためにお手紙をいただいておりますので、読ませていただきます。

主の御名をあげ、賛美いたします。

栗林先生は国際基督教大学より1973年に東京神学大学大学院に入学され、76年に卒業されました。本学ともたいへんなじみの深い先生であられます。先生のご生涯とお働きのことを覚え、感謝の意をお伝えしたいと思います。先生は1987年度より博士課程前期課程二年次、卒業クラスを対象とする実践神学研修課程総合特別講義の部落解放とキリスト教を担当していただき、お忙しい中、伝道者となるための最後の総仕上げの授業に2014年まで、実に27年の長きにわたり、毎年かかさず関西よりご出講くださいました。その授業は先生のご著書『荊冠の神学』に裏打ちされた感銘深いものであったと、学生たちよりうかがっております。私にとりましても栗林先生は学生寮での偉大なる先輩の一人で、部屋でパイプをくゆらしながら、当時の後学のものにとって実に難しい神学談義をする悠然としたお姿が今でも臉に浮かびます。あいにく偲ぶ会には出席できませんが、遠隔の地より先生の足跡を偲ぶとともに、ご遺族の方がた、また学院の親しき交わりにあられた先生がたの上に主のお慰めが豊かにありますように、心よりお祈り申し上げます。

栄光在主

2015年9月8日 東京神学大学学長 芳賀 力

それでは、これで終了させていただきます。みなさん、ありがとうございました。

「栗林神学と日本の教会」(辻学) 参考資料

『荊冠の神学』(1991) 目次 (抄)

序章 予備的考察

(第1部 荊冠の神学に向けて)

第1章 荊冠の神学の主題

第2章 荊冠の神学の性格

第3章 荊冠の神学の資料と規範

(第2部 イエス・キリスト、神、教会)

第4章 荊冠者イエス・キリスト

第5章 荊に下る神

第6章 荊座の教会

第7章 荊冠の神学と解放の神学——「解放」の主題をめぐって

『日本民話の神学』(1997) 目次

序章 民話の世界に漂流する

第1章 五分一の「失樂園」：一寸法師とボンヘッファーの「成人した世界」論

第2章 異界にワープしたお遍路の女：讃岐版シンデレラの神秘体験と四国遍路

第3章 炭焼き五郎兵衛の錬金術：ユングのアニマ・アニムス論と内なるタラント

第4章 ちさりの女とホロコーストの娘：受難の記憶から (ex memoria passionis) 聖書を再読する

第5章 意外な知らせ・じつは桃太郎は女だった：讃岐の女桃太郎とイエス・クリスタ論

図1 栗林先生の神学のあゆみ（大宮有博）参考資料

ステージ	概要
<p>1991-1997 解放の神学の構築</p> <p>貧しい者が語り、虐げられた者から学ぶことを通して、すべての人間の解放の言説となる神学の構築</p>	<p>『荊冠の神学』（1991）～『日本民話の神学』（1997）</p> <p>「歴史の犠牲者らの間に、神の救済的な場があるとして、そこからいっさいのキリスト教の再解釈を試みた。」（『現代神学』：119）</p>
<p>2001-2004 ターニングポイント</p> <p>現代神学のマップを作ることで、日本の神学が今どこにいて、次のステップはどこかを指し示す</p>	<p>ターニングポイントとしての2001-2002年</p> <p>GTUでの在外研修中、Womanist Theologyを代表する神学者 Cheryl Kirk-Duggan の“HISTORY OF THEOLOGY: 1914-1965” と “HISTORY OF THEOLOGY: 1965-TODAY” に出席</p> <p>⇒『現代神学の最前線』（2004）</p>
<p>2005- 政治神学への発展</p> <p>現代とキリスト教の批判的な相関</p>	<p>9.11（2001）⇒『キリスト教帝国アメリカ』（2005）、『アメリカ大統領の信仰と政治』（2009）</p> <p>「しょうがない発言」（2007）～キリスト教平和学の構築 ⇒『原子爆弾とキリスト教』（2008）</p> <p>3.11（2011）⇒ 原発問題への発言</p> <p><未完の2冊></p> <p>「神学者は、今日という時代に有効な福音の解釈をほどこし、時代の課題に積極的に発信し、現代に意味あるようにキリスト教を再解釈する。」（『現代神学』：71）</p>

神学的事情	社会情勢
<p>1990 第1回キリスト教学校人権教育セミナー</p> <p>1990年代=～：黒人神学の第三世代</p> <p>1997～ 本田哲郎による聖書翻訳</p>	<p>1995 阪神淡路大震災</p> <p>1995 オウム事件</p> <p>1995 沖縄で少女に対する暴行事件⇒普天間の基地を辺野古沖に移す案</p> <p>1996 「らい予防法」廃止</p> <p>1999 釜ヶ崎反失業闘争</p>
<p>『鼓動する東アジアのキリスト教—宣教と神学の展望』（2001）</p> <p>Alister McGrathの著作が翻訳される。</p> <p>2003～ 山浦玄嗣によるケセン語訳聖書</p>	<p>2000 外国人登録法による指紋押捺制度廃止</p> <p>2001 9.11</p> <p>2001 「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟で熊本地裁は原告勝訴の判決</p> <p>2002 同和对策事業特別措置法による事業の終結</p>
<p>2005 日本宣教会学会発足</p> <p>2007 日本スピリチュアルケア学会発足</p> <p>『死生学』（1-5巻：2008～）</p> <p>Cornel Westの著作が翻訳される。</p> <p>N. T. Wrightの著作が翻訳される。</p>	<p>2005『嫌韓流』⇒2007在特会⇒ヘイトスピーチ</p> <p>2007 反貧困ネットワーク</p> <p>2011 東日本大震災</p> <p>2012 外国人登録法廃止⇒新しい在留制度が始まる</p> <p>2015 安保法案 SEALDs</p>